

'お' κόσμος, αλλοίωσις 'ο βίος, υπόληψις.'

54号 1992.8.14

文・編集・発行
恋 怪子

LIVE: シオン 1992.7.30 後楽園ホール
7.31



何が面白くて、動物園を傾けたのだ。動物園の四坪半のぬかるみの中で、脚が大股過ぎるやないか。脚があままり長過ぎるやないか。君の降る国にこれは羽がぼろぼろ過ぎるやないか。腹がへるから壁ペンも食ふだらうが、壁鳥の眼は遠くばかり見ているやないか。身も世もない様目燃えてみるやないか。照色の風が今にも吹いて来るのを待ちかまへてみるやないか。あんな小さな素朴な顔が無逆大の夢で遊んでいるやないか。これはもう鹿馬やないやないか。人間よ、もう止せ、こんな事は。

シオンのライブは、観客はみんな席にすわっているから、ステージのシオンがよく見えるし(よくに30日のときは席が前から2列目でシオンの正面だったし)、今回はアコースティック(ギター、キーボード、ウッドベース、パーカッションという編成)なので歌がよくききとれる。そういう意味では、とてもシオンの近くにいるはずなのに、シオンはとっても遠いところにいた。やさしい笑顔をしているのに、伝わってくるのは、哀しいシオン。シオンは、どうしてあんなにたくさんの人たちの前で歌を歌うんだらう? 他人と分ちあえるものなんか、なんにもないって思っているみたいなのに...。ステージで歌っているシオンと、客席でシオンを見つめている私のあいだに心の橋が架からない。現在のシオンは、高村光太郎が「ぼろぼろな馬鹿鳥」で言っている馬鹿鳥とおんなじだ。シオンが生きている場所は、現在はステージの上じゃない。ぼろぼろな馬鹿鳥は動物園の狭いぬかるみの中で、遠くアフリカの平原を見ている。シオンステージの上で、遠いところを見ている。たくさんの人たちを前にして歌っているシオンよりも、もし見ることがあれば、道ばたにすわりこんでいるシオンを見る方が、心の橋が架かるような気がする。

LIVE & WORDS: THE STREET BEATS

1曲目の「BOYS BE A HERO」がはじまってすぐに、私の心はすべてTHE STREET BEATSに占領された。そして、5曲目くらいで「このライブもしかしたらものすごいものじゃないか」って思ってきた。何かどうすごいかじゃなくて、とにかくものすごいって。この日は、じっくりきかせる歌よりも、いっしょに歌い、いっしょに楽しくやるといふ感じの歌が多かった。大部分が今まであまりきいたことのないものや、きいたことがあってもよくバツ好きでないものだったけど、力強いTHE STREET BEATSからよかった! それと、THE STREET BEATSのファンって画一的じゃないって強く感じた。前の方でギョウギョウ詰めにしている子たちは、こぶしをふりあげ、とびはねているし、その後ろの方にいる子たちも、もちろんこぶしをふりあげたりもするけど、全員が同じように同じ動作をするなんてことがない。

今日、このキツアはみんなも知ってるのとおり、今回テレビとかラジオはもちろん雑誌とか音楽誌とかに広告とかもいっぱいにも出す金が俺たちにはなくて、全部ロコミとか、あとこのキツアやホストスタッフの人たちの協力で、今日、見わたす限り人の海というすばらしい動員で... みんな集まってくれて感謝しています。(歓声) 宣伝とかに金かけてもらえれば俺たちもいちばんいいけど、底力というか、こういうところを信じてやっていこうと思うんでよろしくつきあっていって下さい。サンキュー。(歓声)

今日のキツアはやるのを決めたときは、周囲から「まずいんじゃないかとか、恥じかかんようにとか、いろいろいわれたんですけど、いろんな人とおみん厚のおかげで、こんな、自分で言っちゃいけないけど、いいライブというか(拍手)感謝してます。ほんとにサンキュー。以前もマネージメントでつらい状況とかもあったけど、今も、今年でデビュー4年目か、みんなも知っているように、いわゆるロック状況みたいなものがどんどんすりかえられた、っていうか、いろんなふうになって下みたいいな形にされてしまったけど、こういうふうにして、肩はあつて帰るやう、もうぼろちりだ。(歓声、拍手)しつこいけどほんとにサンキュー。いままでもいろいろあったけど、目かくしされてこまで連れてこられたわけじゃないってことです。」

LIVE: LAST DANCE 1992.8.8 新宿アンティノック



ワンマンライブで1時間半以上やった。はじめてきく歌がいくつもあって、それがみんな素敵! 「ディア、マリリン」と「ストレンジ・ナイト」がとくによかった。一人の歌になるまでのヴォーカルの人の心象風景とステージの上の風景とが私の中で、いっしょになる。ライブのおわりの方で、私は音楽という子宮の中で、誕生を待っている胎児のように、なんにも所有するものがない自由と解放を感じていた。LAST DANCEは、身体は自然と踊り出すのに、心の底の深いかなしみをよびます。実に徹底的で、これはあととむく味です。

次のライブ: 9/15 アンティノック

LETTER: FROM & TO: 安田邦弘

「長瀬剛の5月15日東京ドームのコンサートに行かれましたか。僕は友達とで行って来ました。一言、長瀬剛はやっぱり凄い。凄すぎる。(曲目の巡恋歌から凄いいど力で僕の心に迫ってきて、その圧倒的なパワーは、最後のMOTHERまで少しも衰えず、僕の心はぐいぐいと長瀬の中に引き込まれ、はなしでした。僕が色々文句をいっていた曲などもコンサートが持つパワーのおかげ(やっぱり長瀬の持つパワーだと思います)でまた素晴らしいと思えます。I LOVE YOUに至っては涙がでそうになる程感動しました。それにアンコールになってからも1時間くらいコンサートは続き、3時間近くのステージの後、僕も友達も感動という満足感で満たされていました。(中略)しかし、長瀬は本当に凄い。もし行ってないのでしたら、それは凄く惜しい事をしたと思います。」

「私は5月15日東京ドームの長瀬剛のコンサートには行きませんでした。行くつもりでチケットは買ってあったのですが、そのあとで同じ日にTHE STREET BEATSのライブがあることがわかって、チケットは人にゆずって、THE STREET BEATSに行くことに決めたのです。THE STREET BEATSのライブは去年の12月28日以来で、あのときはそれほどいいとは思われず、その頃出たベストアルバム「BEATNIK ROCKER」も買っていませんでした。それにこの6月15日は、他に2バンド出るので、ワンマンライブじゃない。それでも長瀬剛をやめて、なぜTHE STREET BEATSの方にしたかという、それは長瀬剛のアルバム「JAPAN」を全然好きになれなかったからです。それでもアルバムが出てからだいぶ時間がたっているし、もしかしたらライブはいいかもしれないと思ってチケットを買ったのですが、THE STREET BEATSの方をえらびました。6月15日限内CLUB 24のTHE STREET BEATSのライブは1時間くらいでしたけれど、すばらしく力強く、狭いライブハウスなのに、THE STREET BEATSの4人の心臓の鼓動が感じられるようだったし、観客のエネルギーもまさしく4人に伝わっていたと思えました。ですから、私は長瀬剛のコンサートには行きませんでしたけど、全然惜しいことをしたことはないのです。それに、もし仮りにTHE STREET BEATSのライブがよくなかったとしても、それでもやっぱり惜しいことをしたことはないと思うのです。なぜかという、自分でえらんだことを全うしたからです。あの日、THE STREET BEATSは一番最後にやって終ったのは9時半すぎで、関内から東京駅経由で帰って、10時半すぎ電車が水道橋を通るとドームにはまだあかりがついていて、駅までの橋の上は人がいっぱいでした。帰宅してすぐに、この日長瀬剛にいっしょに行くことになっていた友人たちがコンサートがすばらしかったと、次々と電話をくれたときに「心からよかったね、ていえたのも、自分でえらんだことを全うしたからだ」と思うのです。」

1992.8.1 川崎クラブ・チッタ



MOVIE INFORMATION:



8/29~ 銀座 ネパース2



8/15~8/21 銀座 テアム西友 (レイトショー) 9:30PM~

ラストワルツ(ザ・バンドの解散ライブ) レンゾラニ・カーポイズ・ゴウ・アメリカ